

信を伴う出家と世俗の価値観との相剋

日本学術振興会特別研究員 DC

古川洋平 (大阪大学)

本発表は、パーリ語の聖典ニカーヤ中の信 (saddhā) を伴う出家者に見られる、世俗的な価値観に対する問題意識、及び出家生活に対する目的意識を考察することを通じ、出家の信の特徴について一定の見解を提示することを目的とする。

これまでの研究では、信を伴う出家を様々な出家形態の一つとして認知しながらも、信を仏に対する信仰と理解し、修道論の一要素として扱うのがほとんどであった。しかし、この信の具体的内容を示す用例がニカーヤに認められる。それは、「自身は苦に苛まれているが、苦の終わりが洞察され得る」(趣意) という、出家時点での苦の自覚と、その苦の終わり、即ち解脱の達成の可能性に対する確信を示している。ニカーヤには苦行者が信を伴って出家する場合もあり、信を伴う出家は仏弟子に限ったものではない。仏弟子の出家の信は、説法を背景とした、世俗生活に対する何らかの問題意識を念頭に置いていると考えられる。本発表では、以上の点を出発点として、信を伴う出家者の特徴を整理していく。

信を伴う出家者達がどのような背景の元で世俗生活を離れ出家しているのかについて、彼等うちの第一人者とされるラッタパーラは、諸欲の対象 (kāma) にひそむ災い (ādīnava) を見て出家したと語る。ラッタパーラ比丘は財を見せて還俗を勧める父親に対し、財をガンジス河に沈めるよう諭す。彼にとって、世俗的価値観の中で追求されるべき財 (= 諸欲の対象) は結果的に苦をもたらしてしまうものであり、そこにひそむ災いを見るのが世俗に生きる者にも求められる。

このような世俗的価値観に対する態度は、信を伴う出家者自身の内面的な在り方としても現れている。信を伴って出家した者の行為は他者により相応しい/相応しくないと評価されると共に、信を伴う出家者自身もまた、自身の思考を同様に評価する。これらの事例を整理すると、出家の信が、世俗的な欲望を捨てることを前提とした、出家者自身の適切で積極的な行為に繋がるものとして位置付けられていたことが分かる。また、信を伴う出家者は、生活を目的とする (jīvikattha) 出家者と対置される。生活を目的とする者は在家者・出家者に関わらず、諸欲の対象に縛られ没頭している者であり、生活を目的とする出家者は、出家生活の結果達成される解脱ではなく、出家生活そのものを目的としている者達である。

発表者は、以上の事例の分析を通じて、仏弟子の出家の信が苦の終わりの洞察に結びつきながらも、解脱という目的を志向していく側面を持つことを指摘していく。

キーワード：信 (saddhā) / 出家 / 諸欲の対象 (kāma)